

「ひとりじゃない」を知ってほしい

居場所図鑑

独居高齢者やひきこもりの人、こどもやワンオペの保護者など——社会や地域、学校、職場などで孤立している人たちは、何かあったときに頼れる人がいない場合があります。そうした人たちを支援する取り組みや団体にスポットを当てます。



第4回

障害者・難病患者支援

障害者や難病患者を知る機会をつくり 就労や生活の選択肢拡大に努める

大切な福祉の世界にもっと外の空気を入れよう

現在、日本には、障害者手帳を持っている人が約744万人^{※1}、指定難病受給者証を持っている人が約105万人^{※2}、その他希少疾患や難治性慢性疾患を持っている人が約700万人^{※3}いると言われています。

▲相互理解を深める機会を提供



「POSSIBILITY事業」に取り組んでいます。

「私はもともと福祉にまったく接点がなく、19歳のときに友人に誘われて初めて知的障害児(者)の通所訓練施設でのボランティアに行きました。そこで建前のない真つすぐな子どもたちと出会い、かわり合い、学びの連続でした。それから、大学生の間も、社会人になってからもボランティアで通っていたのですが、福祉は非常に大切な分野でありながら、地域や社会の受け入れが乏しいために閉鎖的であることがもどかしく、もっと外の空気が入ればよいのに……と考えるようになりまし」と、同法人理事長の重光喬之さんは話します。

そこで32歳のときに、福祉の現場には学びの価値があること

を発信するとともに、福祉以外の人たちとの接点を増やすことを目的に同法人を設立。当初は知的障害児(者)の支援を中心にしていましたが、現在は障害者・難病患者支援に力を入れています。

疑似体験の機会などを提供
就労調査・分析にも尽力

同法人の立ち上げ当初、重光さんは自身の経験から「療育(囲み参照)指導は、支援している側にも多くの学びを与えてくれる」ことを伝えるべく、企業の社員研修と福祉施設をつなげる取り組みを始めました。社員にとっては人との向き合い方やコミュニケーションを学ぶ機会に、障害児(者)にとっては「いつもの人(指導者)以外とのかわり人が自負の育みに、療育指導者に



特定非営利活動法人
両育わーど
理事長
重光喬之さん

※1: 2022年度福祉行政報告例および衛生行政報告例

※2: 2022年度衛生行政報告例

※3: 国内に公的調査なし。受給者証未所持の指定難病を含む。患者数は、米国の希少疾患法による疾患人口比率より算出(両育わーど)

団体概要

特定非営利活動法人

両育わーど



両育わーど

設立：2012年11月12日

所在地：〒150-0002

東京都渋谷区渋谷3-26-16

第5叶ビル5F co-ba shibuya内

職員数：32人

URL：https://ryoiku.org/

かかわった人の声

20代・男性

難病者は目に見えない症状を抱える人もおり、自分が気づかないだけで身近にも難病者がいるのかもしれないという認識が変わりました。性格や家庭の状況を考慮した働き方ができるように、難病者も自身の症状に合わせた働き方ができるように人々の意識が変わるはずだと信じています。

40代・女性

障害や難病、希少疾患。言葉だけ聞くと、とても重いことに感じられて、どう向き合っているのか難しく感じられるけれど、実際にいろんな方のお話を聞いてみて、勝手に壁をつくっていたのは自分だったのだと気づかされました。

50代・男性

両育わーどでの取り組みは、多彩な背景を持つスタッフがいくつものプログラムを持っており、視野を広げられる活動です。多様性を必要とするこれからの日本社会に必要な取り組みだと考えています。

Q1 法人名の由来は？

「両育(りょういく)」とは、私たちが活動を通して実感した想いから生まれた造語です。難病者・障害者とかかわり手が、支援する・されるの関係ではなく、互いに試行錯誤しながらかわり合い、学び合い、育み合って生きていくという概念を表しています。

Q2 難病者の就労支援のトピックは？

近年、いろいろな自治体や地方議員の方に関心を持ってもらい勉強会を開催しているのですが、ついに山梨県では今年、難病者を対象にした公務員の採用枠が設けられ募集がスタートしています(2月公表)。こうした取り組みが今後どんどん広がっていくことを期待しています。

Q3 読者へのメッセージ

「障害者や難病の人に何て声をかけたらいいかわからない」「どのような配慮が必要かわからない」などの声を聞きますが、かわり方や声のかけ方に正解はありません。また、配慮の必要がない場合や、部分的(時間や場所など)な対応でよい場合も多々あります。障害や難病の有無にかかわらず、それぞれに事情や背景があるのだから、お互い様の気持ちで、まずはかかわってみてはどうでしょうか。



▲啓発ポスター

療育とは……
障害のある子どもに対し、身体的・精神的機能の適正な発達を促し、日常生活および社会生活を円滑に営めるようにするために行う、それぞれの障害の特性に応じた福祉的、心理的、教育的および医療的な援助



▲疑似体験ツール

とってはパターン化されがちなかかわりに新しい気づきを得る機会にと、それぞれに意義のあるものになりました。しかし、社会人と子どもたちの時間を合わせるのが難しく、また法や制度改正の影響もあり、3〜4年で断念するに至りました。次に着手したのが、知らないを知る「THINK UNIVERSALS事業」です。これまで、「障害者や難病者を「よくわからない」を理由に遠ざけている企業や地域について、重光さんは見聞きしてきました。そうした人たちにまずは知ってもらうことが必要だと考え、ポスターを使った啓発や、障害の疑似体験

の機会・コンテンツの提供、当事者の語りを聞くイベントなどを行いました。この事業を経て、障害や難病のある人たちの生活の選択肢を増やし、社会参加をもっと身近なものにするために「THINKS POSSIBILITY事業」も開始。彼らの社会参加を考える研究会の立ち上げや就労の実態調査・分析、社会参加白書の発行、当事者の悩みや困りごとのエピソード共有サイトの立ち上げなどを行っています。

近年はさらに、難病者の就労に関する当事者と企業向けの調査・分析にも力を入れ、就労事例集をつくり企業への認知・啓発に取り組んでいます。「実は、私自身も社会人になってから難病を発症しました。当法人には、私を含めいろいろな病気や背景のある人たちが複数います。私たちは自身が一つの就労モデルになっていくだけでなく、たくさんの事例やデータをもとに企業や社会に向けて、『難病や障害のある人と働くのはそんなに大変なことじゃないですよ』ということも伝えていきたい。障害や難病があってもなくても、自分たちが生きたいように生きられる社会をつくるために試行錯誤しながら、これからも発信をしていきます」

